

## III—9 慢性期重度失語症者の描画, ジェスチャー訓練

○小田柿誠二<sup>1)</sup> 羽飼富士男<sup>2)</sup> 足立さつき<sup>3)</sup> 立石 雅子<sup>4)</sup>

【はじめに】慢性期失語症者に対し、描画、ジェスチャーなどの代償手段獲得訓練を実施した報告が近年なされている。今回、我々は慢性期重度失語症者に対し、描画、ジェスチャーの獲得訓練を同時期に並行して行い、描画、ジェスチャーの学習について検討したので報告する。

【対象】対象は、音声言語の表出が重篤に障害された慢性期重度失語症者13例で、いずれも2年以上の言語訓練を受け、過去2回の評価において言語機能レベルに変化が見られなかった症例である。性別は男性12例、女性1例。医学的診断名の内訳は脳梗塞8例、脳出血3例、くも膜下出血2例で、すべての症例において右片麻痺が認められた。対象の平均年齢は58.5±11.4歳、発症後経過月数38.5±13.6か月、STLA総得点70.8±20.8点、レーヴン色彩マトリシス検査得点25.5±6.9点であった。また13例とも課題実施の妨げとなるような聴覚的理解力の著明な低下、知的機能の著しい低下、失行、失認などを認めなかった。

【方法】訓練前後に刺激語表現検査と伝達性検査を行った。

1. 刺激語表現検査。(評価1)刺激語24語について一語ずつ文字カードを提示し、被験者がそれが何であるか理解できたら、描画もしくはジェスチャーで表現させた。得られた反応について二つの手段のうちいずれを用いたか、およびその表現の正確さを判定した。(評価2)刺激語24語を描画、ジェスチャー各々で表現させ、その正確さを評価した。

2. 伝達性検査。日常生活における情報伝達の状況を見るために「ビール」と「コップ」の絵カードを提示し、「ビールを飲むには、あと何が必要ですか」と問い、「栓抜き」を表現させるなど6項目について伝達の正確さを評価した。

【訓練】刺激語24語を語のカテゴリー、使用頻度等がほぼ等しくなるように訓練語、非訓練語に二分した。訓練語12語を3語ずつ4セットに分けた。1セット目についてはジェスチャー、次に描画の順で訓練を行った。まずSTが3語について一語ずつ文字カードを被験者の前に置き、ジェスチャー(描画)での表し方を示して見せる「提示」。次にSTがジェスチャー(描画)で表現したものを3枚の文字カードから選択させる「マッチング」。さらにSTのジェスチャー(描画)を見て真似させる「模倣」。最後に被験者の前に文字カードを提示し、被験者にジェスチャー(描画)で表現させる「再生」の4段階を順に施行した。

【結果および考察】描画、ジェスチャー各々で表現させた(評価2)における訓練語、非訓練語別に見た正答率の訓練前後での変化を検討した(図1)。訓練終了後、正答率は訓練語、非訓練語ともに上昇したが、訓練語でより上昇率が高かった。訓練語については訓練終了後の正答率は描画66.9%、ジェスチャー53.8%で描画でより上昇した。一方、非訓練語では訓練終了後の正答率は描画38.5%、ジェスチャー43.6%で描画とジェスチャーの上昇の幅に大きな差はなく、また訓練語に比べ正答率の上昇の幅が狭い傾向を示した。訓練語、非訓練語ともに正答率が上昇したことは、代償手段獲得訓練が言語機能レベルに変化が認められなくなった慢性期失語症者のコミュニケーション

1) 九十九里ホーム病院 リハ科  
2) 小田原市立病院 リハ室  
3) 日本福祉教育専門学校 ST科  
4) 慶應義塾大学病院 リハ科

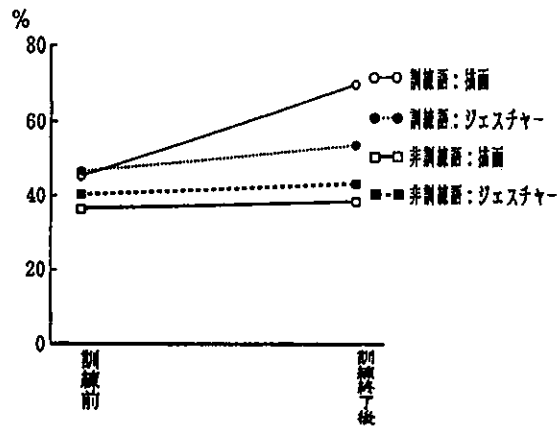


図1 訓練語、非訓練語を描画、ジェスチャー各々で表現させた場合の正答率

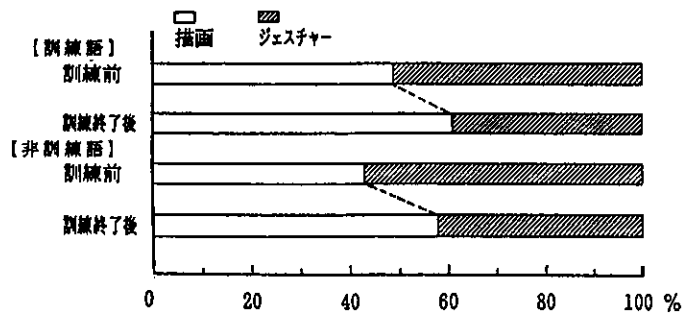


図2 訓練語、非訓練語を描画もしくはジェスチャーで表現させた場合の使用手段の比率

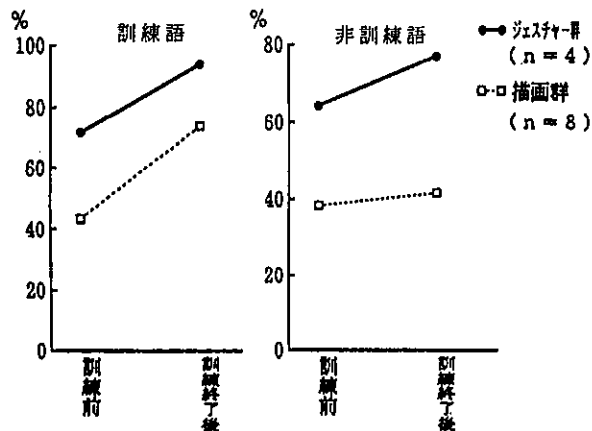


図3 描画もしくはジェスチャーで表現させた場合の訓練語、非訓練語別正答率 (ジェスチャー群、描画群)

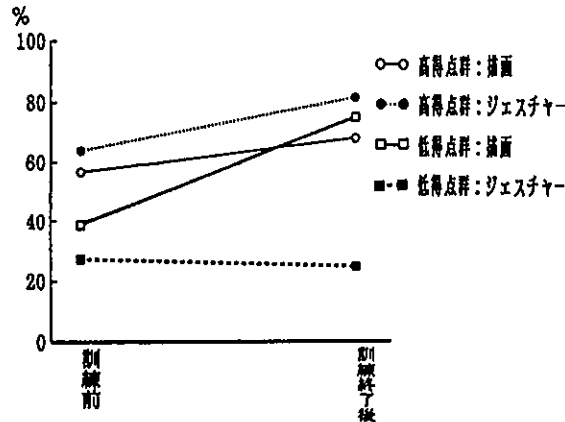


図4 訓練語を描画、ジェスチャー各々で表現させた場合の正答率（高得点群、低得点群）

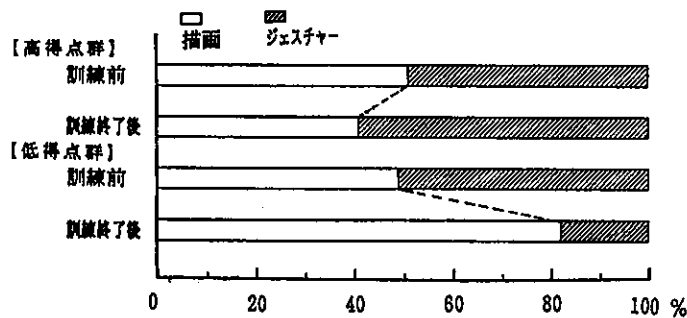


図5 訓練語を描画もしくはジェスチャーで表現させた場合の使用手段の比率（高得点群、低得点群）

ン能力の改善につながることを示唆するものと考えられた。

次に描画、ジェスチャーのいずれか1つで表現させた（評価1）で得られた正答について、使用した手段の比率を訓練語、非訓練語別に比較した（図2）。訓練語では訓練前に描画とジェスチャーとの比較はほぼ等しく、訓練終了後は描画62.1%、ジェスチャー37.9%と描画の占める比率が高くなった。非訓練語においても訓練終了後の比率は、描画58.1%、ジェスチャー41.9%と訓練前に比べ描画の方が増加した。訓練語、非訓練語とも訓練終了後、描画の占める比率が高くなった。先に見たように描画、ジェスチャー各々で表現させた（評価2）においても、訓練終了後に描画の正答率がジェスチャーに比べより上昇したことから、描画はジェスチャーに比べ学習しやすいと考

えられた。

次に各症例について見ると、訓練終了後に描画の正答率がジェスチャーより高い描画群（8例）とジェスチャーの正答率が描画より高いジェスチャー群（4例）、描画とジェスチャーの正答率が同じであった1例に分類された。この描画群とジェスチャー群について描画、ジェスチャーのいずれか1つで表現させた（評価1）の正答率を訓練語、非訓練語別に検討した（図3）。訓練語、非訓練語いずれにおいてもジェスチャー群は描画群に比べ高い正答率を示した。ジェスチャー群と描画群の両群間では年齢、発症後経過月数、レーヴン色彩マトリシス検査得点には有意差を認めなかったが、伝達性検査得点ではジェスチャー群18.3点、描画群12.3点で有意差が認められた（ $P < 0.05$ ）。そこで伝達性検査と描画、ジェスチャーと

の関係について検討した。

伝達性検査では伝達の正確さを5段階で評価した。その総得点の中央値で高得点群、低得点群に二分した。訓練語を描画、ジェスチャー各々で表現させた(評価2)の正答率を高得点群、低得点群の別に示すと(図4)、高得点群は訓練前後ともジェスチャーの正答率が描画に比べ高く、描画、ジェスチャーともに訓練終了後の正答率は上昇した。一方、低得点群では訓練終了後、描画の正答率のみ上昇した。

また描画、ジェスチャーのいずれか1つで表現させた(評価1)の正答について、使用した手段の比率を高得点群、低得点群別に示すと(図5)、両群とも訓練前は描画とジェスチャーはほぼ等しい比率であった。訓練終了後には高得点群では描画40.5%、ジェスチャー59.5%とジェスチャーの占める比率が高くなった。低得点群では描画82%、ジェスチャー18%と描画の占める比率がかなり高くなった。情報をより正確に伝達できる高得点群では描画、ジェスチャー双方が習得され、一方、低得点群では描画は学習されやすいが、ジェスチャーは学習されにくいことが明らかとなった。

ジェスチャーは道具を使用しない簡便な手段であるが、その使用は視覚的なイメージの想起にとどまらず、種々の意味の想起やその中から最も適切

かつ特徴的な要素を抽出する能力などが必要とされ、ジェスチャーの使用と情報伝達の正確さとの間には関連のあることが推察された。伝達性検査は情報の伝達性という一側面からコミュニケーション能力の程度を表すものと考えられ、この検査における高得点群と低得点群で描画、ジェスチャーの学習が異なったことから、重度の失語症者の中でコミュニケーション能力により代償手段の獲得には差異があることが示された。

【まとめ】慢性期重度失語症者13例を対象に、描画、ジェスチャー2つの代償手段獲得訓練を同時期に並行して行った。刺激語を描画、ジェスチャー各々で表現させた場合の正答率は訓練終了後、訓練語、非訓練語ともに上昇した。刺激語を描画、ジェスチャーのいずれか1つで表現させた場合の正答では、訓練語、非訓練語とも訓練終了後は描画の占める比率が高くなった。伝達性検査における高得点群では描画、ジェスチャーともに上昇したが、低得点群では描画のみ正答率が上昇した。描画、ジェスチャーのいずれか1つで表現させた場合の正答について、訓練終了後、高得点群では描画に比べジェスチャーの比率が高く、低得点群では描画の占める比率が高くなった。重度失語症者の中でコミュニケーション能力の程度により代償手段の習得に差異があることが示唆された。